

エディション比較研究 ショパン《ピアノソナタ第2番Op.35》 —系譜をたどる— (2)

A comparative study by several scores on Chopin's
《Piano Sonata No.2 Op.35》
— trace the line of score — (2)

仲田 久美子
Kumiko NAKADA

はじめに

ショパンの作品は、様々な人の手によって編纂され出版され続けている。その中で近年特に注目されているのは原典版の存在である。ショパンの作品で原典版とされている版には、ヘンレ版やエキエル版がある。それらの巻末に編纂過程についてのすべての詳細が掲載されているわけではないが、どちらにも校訂に関する解説が掲載されている。そこには原典資料や編纂方法などが記載されているため、どのような経緯でその譜面を完成させるに至ったかが、おおよそではあるがわかるようになっている。

原典版が重視されるようになる前のショパンの作品の出版は《ピアノソナタ第2番》の場合、おおまかに区分するなら、出版される前（1839年～40年）、出版後しばらく（1841年～1880年頃までの版権が切れるまでの間）¹、その後（版権が切れてから現在まで）の3期に分けることができる。² この作品の場合、まず出版される前の時点ですでに内容が少しずつ異なる3つの版（フランス、ドイツ、イギリスの各国で1版ずつ出版され、その後も第2刷、第3刷が存在することもあった）が存在していたし、出版後しばらく、また特に版権が切れてから現在までに至っては多くの版が出版されている。

ショパンの死後、特に版権が切れてからは、音楽学者やピアニストなどの研究者達によって多くの版が出版されている。このとき、実用的な版や批判的な版などの校訂には、編纂者の考えや意見が多く取り入れられることとなり、結果的に構成や訂正というかたちで譜面が書き換えられることもあった。そして、多くの版は実用版であるため、どの版を参考にして自社の版を作製したかを明らかにしていない。1楽章のエディション比較研究をした際、ペータース版が多くの版に影響を及ぼしているということに確証が持てたと思われるし、また版によっては非常に多くの共通点を持つことがわかった。³

よって、本論では、巻末解説の付いていない版が数多く出版された、特に1900年以降の版の音の違いに焦点を絞り比較検証をし、それらの系譜を明らかにしていく。

1. 様々な版について

ショパンの《ピアノソナタ第2番》においては、初版や初期の版以外に、まず、版権が切れる前の1860年にテレフセン⁴編纂でリショー社から出版された『フレデリック・ショパンのピアノ曲集』（全12巻）がある。この全集の編纂を引き継いだのがミクリ⁵で、彼は序文で「編集者が病に倒れたため

1 ショパン（1810-1849）の出版物は1880年頃から発刊された。大崎滋生『楽譜の文化史』（音楽之友社、1993年）、170頁。

2 仲田久美子『岐阜大学教育学部研究報告人文科学第59巻第2号』（岐阜大学教育学部、2011年3月）79頁。

3 仲田久美子、同上書、90頁。

4 テレフセン（Tellefsen, Tomas Dyke Acland, 1823-1874）はノルウェーのピアニスト、作曲家、教師。エーゲルディンゲル、242-3頁。

5 ミクリ（Mikuli, Karol, 1819-1897）はアルメニア系家族の出身のショパンの弟子でピアニスト、教育者、作曲家。エーゲルディンゲル、250-1頁。

にこのリショー版は不完全なものになった」(エーゲルディンゲル, 『増補改訂 弟子からみたショパン』米谷治郎, 中島弘二訳, 音楽之友社, 2009年, 243頁)と断りを入れている。その後ミクリは、1880年にキストナー社の『ショパン作品集』(全17巻)の編纂をしている。パデレフスキ版では、このキストナー社の楽譜のことをミクリ版と呼んでいる(パデレフスキ校訂, 田村進, 寺田由美子訳, アーツ出版, 1993年, 123頁)。

その後、1880年頃、ブライトコプフ・ウント・ヘルテル社が『ショパン全集』(全14巻)を(大崎滋生, 『楽譜の文化史』, 音楽之友社, 1993年, 194頁), さらに、ペータース社も『ショパン全集』を出版している(Temperley, Nicholas 『ニューグローヴ世界音楽大事典』第8巻, 遠山一行訳, 講談社, 1997年, 567頁)。ニューグローヴ世界音楽大事典には、これら3つの1880年頃出版された全集について、「いずれも相異なる写本と版を用いているが、すべての作品の出所を調査して明らかにしたものではない。近年出版された膨大な数の版のほとんどはこれら三つの版のうちの一つと見られる(後略)」(Temperley, 567頁)と記載されている。残念ながら筆者はこれら3つの楽譜を閲読することができなかったため今回の比較には使用していない。そのため、今回の拙論で使用したペータース版とこのペータース社の『ショパン全集』が同様の内容かどうかについてはいまのところまだ確認できていない。

さらに1932年には、ガンシュ⁶編纂のオックスフォード原典版『ショパン全集』が出版されている。この事業は「学術的根拠のある版を作ろうという最初の本格的な作業が完遂された」(Temperley, 567頁)ことによる。⁷ また、パデレフスキ版には「クリントヴォルト編纂のボーテ・ウント・ボック社版」という版名が記載されており、パデレフスキ版にはこの版を参考にしたことが書かれている(パデレフスキ校訂, 124頁)。しかし、今回拙論で比較検証に使用するクリントヴォルト編纂でイギリスのAUGENER社から出版された版が、パデレフスキ版が参考にした版と同一の内容かどうかは不明である。

2. 検証方法と内容

各版を比較するにあたり、拙論ではショパンの初版が公開されているホームページ⁸に掲載されている譜面から情報を得てそれらを初版とし、検証の対象とした。つぎに、校訂報告が掲載されている版についてはその内容から、参考にされたであろう版を推測して検証した。そのあとで筆者が手にすることができた版を比較した。

使用楽譜については最終頁に「使用楽譜とその略号一覧」に掲載した。ただし、使用した楽譜に記載されている出版年をそのまま転記したため各社の第1刷の出版された年と同じでない場合がある。そのうちいくつかの版は出版年が不明であるため、その場合は国立音楽大学附属図書館のデータをもとにした。また、楽譜の通称は出版社名でよばれるものと、校訂者名でよばれるものがあり厳密には統一されていない。そのため、拙論では出版社名及び校訂者名のいずれかのアルファベットの最初の一部分を略して記載した。略号については「使用楽譜とその略号一覧」を参照されたい。いくつかの版で日本語訳されたものについては翻訳前の譜面と内容が同じであることから今回は比較の対象としなかった。拙論ではポーランド国立音楽出版局から1950年に出版されたものをパデレフスキ版、また、同局から1995年に出版されたものをエキエル版と呼んでいる。

なお、今回比較するのは、音の違いのみについてである。この一点を比較対象として選んだのは、音そのものについては校訂者が主観を出しにくいと考えたからである。記譜の違い、各種記号、スラー、運指、ペダリングについては、今回は比較検証の対象としていない。また、第1楽章の音の違いにつ

6 ガンシュ (Ganche, Edouard, 1880-1945) はフランスの音楽学者。エーゲルディンゲル, 141-2頁。

7 仲田久美子, 前掲書, 80頁。

8 Chopin's First Editions Online (CFEO), <http://www.cfeo.org.uk/dyn/index.html>。

いては、既に比較検証しているため、本論ではそれらの音の違いについては改めて提示せず、そのときのデータのみを使用する。そして、各版を比較するにあたり、エキエル版の解説において明らかに落丁と判断されている項目については取り上げていない。また、小節番号はエキエル版の小節番号を記した（パデレフスキ版とクルチ版には小節番号では第104小節目の1括弧と次の小節の2括弧を別の小節としているが、ヘンレ版とエキエル版では同じ小節番号をつけている。よって、前者は後者より1小節多くなり小節番号にずれが生じる）。また、譜例についてはエキエル版を引用した（別の版を引用する際は版名を明記した）。なお、文中の音名はドイツ式で表記した。また、2楽章は4分の3拍子、3楽章は4分の4拍子、4楽章は2分の2拍子であるため、拍の数え方もそれに従っている。

3. 比較検証

①音の違い（第2楽章、4分の3拍子）

1) 第32小節～34小節、1拍目と2拍目のト音譜表cis²音とヘ音譜表cis音にタイがついていないのはFE, EE, GE, Ka, Klで、その他の版ではタイがついている。【譜例1】第31～36小節

2) 第40小節、3拍目のト音譜表で、b²音がなくes²音とes³音のオクターヴなのはFE, GE, Mi, Du, Co, Ka, Ku, Kr, Ekであり、その他の版ではes²音、b²音、es³音である。なお、AgとHeではb²音に括弧がつけられている。【譜例2】第37～40小節

3) 第265小節及び第266小節、1拍目と2拍目のヘ音譜表cis音にタイがついていないのはFE, EE, GE, Mi, Ka, He, Krである。その他の版ではタイがついている。なお、Ekでは括弧付きのタイである。【譜例3】第264～267小節

4) 第273から276小節, ヘ音譜表のdes音, ges音, ges¹音に小節線をまたぐタイがついていないのはFE, EE, GE, Ka, Sa, Ag, He, Paで, その他の版ではタイがついている。【譜例4】第271~276小節



5) 第283小節, ト音譜表の和音がb音, des¹音, ges¹音, b¹音なのはFE, EE, Kl, Ekであり, その他の版ではges音, des¹音, ges¹音, b¹音である。なお, Ekには米印がついており, 両方掲載されている。【譜例5】第279~283小節



② 音の違い (第3楽章, 4分の4拍子)

1) 第4小節, 1拍目の前打音があるのはFE, EE, Mi, Du, Pe, Sa, Kl, Ku, Ri, Ag, Pa, Ekで, その他の版には前打音がない。【譜例6】第1~4小節



2) 第7小節及び第8小節, 各1拍目の8分音符が付点になっているのはGE, Co, Ka, Sa, Kl, Ku, Ri, Ag, He, Krであり, その他の版では8分音符である。Ekは付点の楽譜も上部に掲載している。【譜例7】第5~8小節

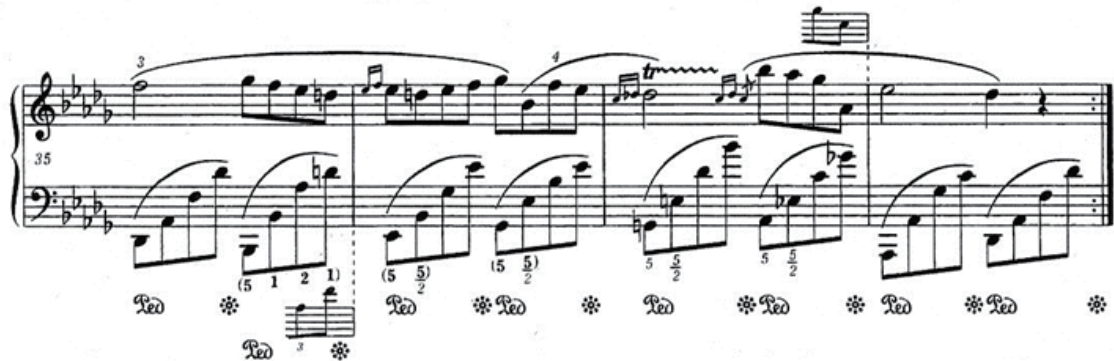


3) 第11小節及び第12小節，ト音譜表のdes²音が2分音符なのはFE, EE, GE, Mi, Co, Ka, Sa, He, Kr, Ekであり，その他の版では4分音符である。【譜例8】第10～14小節



4) 第14小節，ト音譜表，2拍目が8分音符なのはFE, EE, Pa, Ekで，その他の版では8分音符に付点がついている。【譜例8】

5) 第35小節，ヘ音譜表，最後の8分音符がf¹音なのはEEで，その他の版ではd¹音である。Ekでは両方掲載している。【譜例9】第35～38小節



6) 第37小節，ト音譜表，3拍目の前打音について，c²音があるのはEE, Co, Pe, 春秋, Ri, Ag, Kr, Pa, Ekであり，その他の版ではc²音がない。【譜例9】

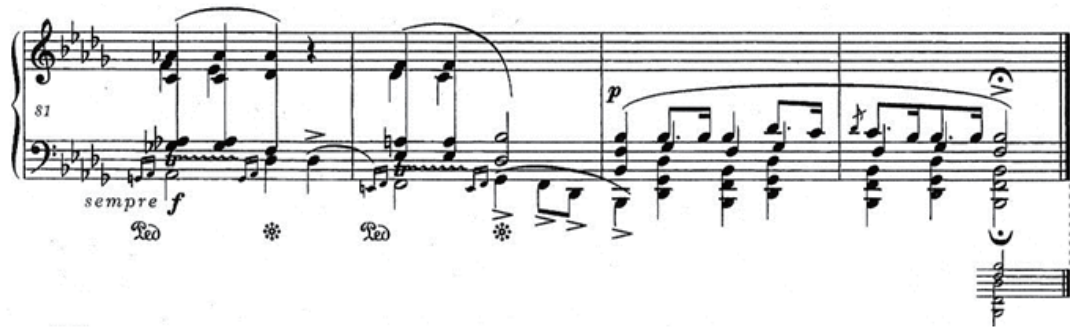
7) 第37小節，ト音譜表，最後の8分音符がc²音なのはEEで，その他の版ではas¹である。Ekでは両方掲載している。【譜例9】

8) 第45小節, へ音譜表, 2つ目の8分音符がges音なのはMi, Co, Kl, Kr, Ekであり, その他の版ではes音である。Ekでは両方掲載している。【譜例10】第43~46小節



9) 第45小節, ト音譜表, 4拍目の前打音がes²だけなのはEEであり, 他の版ではc², es²である。Ekでは両方掲載している。【譜例10】

10) 第84小節, 3拍目の和音がB¹, F, B, f, bなのはMi, Co, Sa, Kl, Ag, Pa, Ekであり, その他の版ではB¹, F, des, f, bである。Ekでは両方掲載している。【譜例11】第81~84小節



③音の違い (第4楽章, 2分の2拍子)

1) 第12小節, 両譜表, 1つ目の3連符の2つ目の音がes音及びes¹音なのはCo, 春秋, Ku, Ri, Agであり, その他の版ではe音及びe¹音である。【譜例12】第10~12小節 なお, 春秋とKrには注が付けられている。



2) 第35小節及び第36小節の両譜表の2つ目の3連符の2つ目の音及び3つ目3連符の3つ目の音, 及び第37小節の1つ目の3連符の3つ目の音と3つ目の3連符の1つ目の音において, ges音及びges¹音なのはFE, EE, GE, Ka, Ekである。その他の版ではg音及びg¹音である。【譜例13】第33~38小節

3) 第37小節, 両譜表の3つ目の3連符の3つ目の音及び, 4つ目の3連符の2つ目の音において本位記号がなくes音及びes¹音なのはSaである。また, Krでは第37小節の4つ目の3連符の2つ目の音がdes音及びdes¹音である。【譜例13】

4) 第46小節のあとに2小節多く付き全体が77小節になる版はFE, GE, Du, Ka, Pe, 春秋, Kuであり, その他の版では省略されて全体が75小節になる。【譜例14】春秋 第46~48小節

5) 第50小節, 両譜表, 4つ目の3連符3つ目の音がh音及びh¹音なのはFE, EE, GE, Co, Ka, Sa, Krである。Heでは括弧付きで変位記号がついておりb音及びb¹音である。また, Ekでは上部に括弧付きで変位記号が記載されているが, h音及びh¹音である。その他の版ではb音及びb¹音である。【譜例15】第48~50小節

6) 第63小節, 両譜表, 3つ目の3連符の2つ目の音がA音及びa音なのはEEであり, その他の版ではAS音及びas音である。また, Ekでは括弧付きで本位記号が記載されている。【譜例15】第63~65小節



7) 第75小節, 1拍目, へ音譜表がB¹音及びB音より1オクターヴ低いものはKlで, Sa及びRiでは括弧付きで1オクターヴ低い音である。また, Ekでは米印を付けて1オクターヴ低く演奏する方法を記載している。【譜例16】第72~75小節



4. 検証

ここまで第2楽章から第4楽章の音の違いに焦点を絞り顕著な違いの見られた22か所について比較検証をした。系譜をたどるにあたっては2. 検証方法と内容で述べたように、筆者が2011年3月に比較検証した第1楽章で取り上げた音の違いの13か所も加え、全35か所について比較検証をし、その結果をもとに、最も共通点の多かった版を系譜でつないでいく。

まず初版であるFE, EE, GEのそれぞれの関係について述べる。FEとEEは77.14%, FEとGEは71.42%, EEとGEでは48.57%の類似であった。ショパンのピアノソナタ第2番では自筆譜が存在しないため初版は大切な資料であり、これら3つの初版の時点で以上のような差が発生している。しかしEkには「EEはFEの第4刷である」ということが書かれている(J. Ekier, PWM, 1995, 別冊校訂報告5頁)ことから、EEとGEに大きな差があるということは系譜をみるうえで重要な点であると思われる。

ここからは出版年を追って検証していく。Miは、FEとは57.14%, EEとは48.57%, GEとは51.42%の類似であった。Miは「パデレフスキ版では、このキストナー社の楽譜のことをミクリ版と呼んでいる」(パデレフスキ校訂, 123頁)ということからも1880年に出版された楽譜と同じものと捉えてよいと考えられる。また、Miより後世に出版された版とMiを比較すると、多くの共通点をもつ版が多いことに気付く。どの版も各初版とはそれほど類似していなくても、Miとはかなりの類似点がある。このことから、Miが楽譜製作においての情報源として重要視されてきたことがわかる。

そしてPeは、FEとは42.85%, EEとは48.57%, GEとは45.71%の類似であり、どの初版ともそれほど強く似ているとは言い難い。Peが1880年頃出版された版と変更されておらず同じ内容のまま出版されているのなら、DuやCoやKaより先に分析すべきであると考えられる。そして筆者はPeが1880年頃出版された版と同じであるとして話をすすめていく。その理由はこの時期のドビュッシーについて述べたルシュールの著書にある。

彼はブライトコップフ版（I. フリートマン校訂）のショパンの楽譜をペータース版（H. ショルツ校訂）のそれよりも遥かに優れていると考えたが、同じ作品に様々な稿を提供している三つの手書き譜を前にして、自分の無力さを告白したりもした。さらに、出版者自身、その点で、自分の協力者たちに科学的な根拠を提供することからはほど遠かった。⁹

以上のことから、ドビュッシーがPeを参考資料として使用したことが推測できる。また、この文章から、ドビュッシーがPeよりブライトコップフ版を評価していたことがわかる。また「三つの手書き譜」はFE, EE, GEと思われるが確証はない。そして出版者であるデュランが校訂のための資料をほとんど持ち合わせていなかったこともわかる。ドビュッシーによって校訂され1915年頃に出版されているDuはPeと91.42%の類似であった。しかしながら今回フリートマン校訂のブライトコップフ版を手にするのができなかったことは非常に残念である。

1924年に出版されたKrは、FEとは51.42%、EEとは37.14%、GEとは62.85%の類似であった。またMiとは68.57%、Duとは54.28%の類似であった。これらのことから、KrはMiに最も類似し、またGEとも比較的近いといえる。1930年に出版されたCoは、どの初版よりも共通点が多いのがMiで、74.28%の類似であった。そして1947年に出版されたKaは、全楽章でみた場合のGEとの類似率は91.42%であるが、第2楽章から第4楽章のみで比較した場合は100%同じであった。

1948年に出版されたSaは、最も類似しているのがDuで、68.57%の類似であった。しかし、これはとりわけ高い類似率とは言えないであろう。このことはSaが強い個性をもった版であることの証であると思われる。1949年に出版された春秋は、Peに88.57%類似しておりほとんど同じであるといえる。このことから、春秋はPeの影響を大きく受けていると思われる。例えば第1楽章の第151小節と第152小節にある注では「ペーテルス版その他では『♯ト音』になっているが、『変ト音』の方が正しい」とある。なお、『♯ト音』なのはDu, Pe, Klである（岐阜大学教育学部研究報告人文科学第59巻第2号、2011年3月、82頁参照）。つまり、ここで言う「その他」とはDuのことであると推測される。また、第3楽章の第7小節と第8小節の注には「コルトー版では初めの二つの音は次のように附点音符になっている」とある。付点音符なのはGE, Co, Ka, Sa, Kl, Ku, Ri, Ag, He, Krであるから（② - 2参照）Co以外の版は参考にしなかった可能性が考えられる。他には第3楽章の第84小節の注において「コルトー版その他では『変ニ音』が『変ロ音』となって、和音の第三音が省かれている」とある。『変ロ音』なのはMi, Co, Sa, Kl, Ag, Pa, Ekである（② - 10参照）。つまり、「その他」の版はMiを指していると考えられる。第4楽章の第12小節の注では「多くの版は『♯ホ音』であるが、『変ホ音』の方がよいと思う」とある。ここでの「多くの版」とはFE, EE, GE, Mi, Duのいくつかを指していると考えられる（③ - 1参照）。以上をまとめると春秋はMi, Du, Pe, Coを参考にした可能性が高いと考えられる。

春秋と同じ年の1949年に出版されたKuは、Duと80.00%の類似であった。そしてPaが参考にしたと巻末校訂報告に記載されているKlは、FEとGEとは34.28%、EEとは25.71%の類似であり、どの初版とも類似していない。しかしKlはPeと74.28%、Duとは71.42%の類似であった。このことからKlのPeへの信用と当時のPeの多大な影響力が伺える。その翌年の1950年に出版されたPaは、FEとGEとは48.57%、EEとは42.85%の類似であり、この結果だけでは特にどの版と類似していると断定はできない。その他方でPaはPeと77.14%、Miとは71.42%の類似であることから、比較的Peに近いといえるであろう。なお、Paの巻末解説にはPeを参照したという記述はなく、ボータ・ウント・ボック社から出版されたKlを参照したことが記載されている（パデレフスキ校訂、124頁）が、残念ながら今回使用したKlと、Paが参考にしたと記載しているKlの内容が同一かどうか確認できていな

9 フランソワ・ルシュール『伝記ロード・ドビュッシー』笠羽映子訳、（音楽之友社、2003年）377頁。

ルシュール, フランソワ『伝記クロード・ドビュッシー』笠羽映子訳, 東京: 音楽之友社, 2003年。

使用楽譜とその略号一覧

- FE: Chopin, Frédéric. *Sonate, Op.35*, Paris: Troupenas & Co., 5/1840, T.891, ©Bibliothèque National de France, <http://www.cfeo.org.uk/apps/>.
- EE: Chopin, Frédéric. *Grande Sonate, pour le Piano Forte, Op.35*, London: Wessel & Co., 10/6/1840, W&CoNo3549, ©The British Library, <http://www.cfeo.org.uk/apps/>.
- GE: Chopin, Frédéric. *Sonate pour le Piano, Op.35*, Leipzig: Breitkopf&Härtel, 5/1840, No.6329, © University of Chicago Library. <http://www.cfeo.org.uk/apps/>.
- Mi: Chopin, Frédéric. *Sonata*, edited&fingered by C. Mikuli, New York: Schirmer, 1895, 11744.
- Du: Chopin, Frédéric. *Sonate*, edited by C. Debussy, Paris: Durand, [c.1915], D&F9708.
- Co: Chopin, Frédéric. *Sonate*, edited by A. Cortot, Paris: Salabert, 1930, E.M.S.5192.
- Ka: Chopin, Frédéric. *Sonate*, compiled by A. Lipsky, New York: E.F. Kalmus, [c.1947].
- Pe: Chopin, Frédéric. *Sonaten*, kritisch revidiert von H. Scholtz/ Neue Ausgabe von B. v. Pozniak, Frankfurt: c.f. Peters, [c.1948], 9899.
- Sa: Chopin, Frédéric. *Sonate*, edited by E. Sauer, Mainz: B.Schott's Söhne, [c.1948], 0398/99.
- Kl: Chopin, Frédéric. *Sonate*, revised by C. Klindworth and X. Scharwenka, London: Augener's, 1949, No.304
- 春秋: Chopin, Frédéric. *Sonata*, 井口基成校訂, 東京: 春秋社, 1978年, (第1刷は1949年発行)。
- Ku: Chopin, Frédéric. *Sonaty*, Ridi. Dr.V. Holzknegt/ Revidoval V. Kurz, Prague: Melantrich, 1949, M106.
- Ri: Chopin, Frédéric. *Sonate*, edited by Brugnoli- Montani, Milano:Ricordi, [c.1956], E.R.2501.
- Ag: Chopin, Frédéric. *Sonate*, edited by G. Agosti, Milano: Curci, 1965, E.8098C.
- He: Chopin, Frédéric. *Klaviersonate*, edited by E. Zimmermann, fingering by H.M. Theopold, München: Henle, 1976/2004, 289.
- Kr: Chopin, Frédéric. *Sonate*, L.クロイツァー校訂, (訳者不明), 東京: 音楽之友社, 1992年。(=edited by L. Kreutzer, Berlin: Ullstein, [c.1924], T.A.183.)
- Pa: Chopin, Frédéric. *Sonaty*, I.J.パデレフスキ校訂, 田村進, 寺田由美子訳, 東京: アーツ出版, 1993年。(= edited by I.J. Paderewski, Krakow: PWM, 1950, PWM235.)
- Ek: Chopin, Frédéric. *Sonaty*, edited by J. Ekier, Krakow, PWM, 1995/2004, PWM9731.

